

フランドン農学校の豚

宮沢賢治

青空文庫

〔冒頭原稿一枚？なし〕

以外の物質は、みなすべて、よくこれを撰取して、脂肪若くは蛋白質となし、その体内に蓄積す。―とこう書いてあったから、農学校の畜産の、助手や又小使などは金石でないものならばどんなものでも片つ端から、持つて来てほうり出したのだ。

尤もこれは豚の方では、それが生れつきなのだし、充分によくなれていたから、けしていやだとも思わなかった。却つてある夕方などは、殊に豚は自分の幸福を、感じて、天上に向いて感謝していた。というわけはその晩方、化学を習った一年生の、生徒が、自分の前に来ていかにも不思議そうにして、豚のからだを眺めて居た。豚の方でも時々、あの小さなそら豆形の怒つたような眼をあげて、そちらをちらちら見ていたのだ。その生徒が云つた。

「ずいぶん豚というものは、奇体なことになっている。水やスリツパや藁をたべて、それをいちばん上等な、脂肪や肉にこしらえる。豚のからだはまあたとえば生きた一つの触媒だ。白金と同じことなのだ。無機体では白金だし有機体では豚なのだ。考えれば考える位、これは変になることだ。」

豚はもちろん自分の名が、白金と並べられたのを聞いた。それから豚は、白金が、いちも一 三十円することを、よく知っていたものだから、自分のからだに二十貫で、いくらになるということも勘定かんじょうがすぐ出来たのだ。豚はびたつと耳を伏せふ、眼を半分だけ閉じて、前肢まえあしをきくつと曲げながらその勘定をやったのだ。

20×1000×30=600000 実に六十万円だ。六十万円といったならそのころのフランドンあたりでは、まあ第一流の紳士しんしなのだ。いまだつてそうかも知れない。さあ第一流の紳士だもの、豚がすっかり幸福を感じ、あの頭のかげの方の鯨さめによく似た大きな口を、にやにや曲げてよろこんだのも、けして無理とは云われない。

ところが豚の幸福も、あまり永くは続かなかつた。

それから二三日たつて、そのフランドンの豚は、どざりと上から落ちて来た一かたまりのたべ物から、(大学生諸君、意志を鞏固きょうこにもち給えたま。いいかな。)たべ物の中から、一寸細長い白いもので、さきにもじかい毛を植えた、ごく率そつちよく直に云うならば、ラクダ印の歯磨楊子はみがきようじ、それを見たのだ。どうもいやな説教で、折角洗礼を受けた、大学生諸君にすまないが少しこらえてくれ給え。

豚は実にぎよつとした。一体、その楊子の毛をみると、自分のからだ中の毛が、風に吹ふ

かれた草のよう、ザラツザラツと鳴ったのだ。豚は実に永い間、変な顔して、眺めていたが、とうとう頭がくらくらして、いやないやな気分になった。いきなり向うの敷藁しきわらに頭を埋うめてくるつと寝ねてしまったのだ。

晩方になり少し気分がよくなって、豚はしずかに起きあがる。気分がいいと云ったつて、結局豚の気分だから、苹果りんごのようになくなくし、青ぞらのように光るわけではもちろんない。これ灰色の気分である。灰色にしてややつめたく、透とうめい明めいなるところの気分である。さればまことに豚の心もちをわかるには、豚になって見るより致いたし方かたない。

外来ヨークシャイヤでも又黒いバアクシャイヤでも豚は決して自分が魯鈍ろどんだとか、怠惰たいだだとかは考えない。最も想像に困難なのは、豚が自分の平らなせなかを、棒でどしやつとやられたとき何と感ずるかということだ。さあ、日本語だろうか伊太利亜語イタリアだろうか独乙語ドイツだろうか英語だろうか。さあどう表現したらいいか。さりながら、結局は、叫び声以外わからない。カント博士と同様に全く不可知なのである。

さて豚はずんずん肥ふとり、なんべんも寝たり起きたりした。フランドン農学校の畜産学の先生は、毎日来ては鋭すい眼まなこで、じつとその生体量を、計算しては帰って行った。

「も少しきちんと窓をしめて、室へや中じゆう暗くしなくては、脂あぶらがうまくかからんじやないか。

それにもうそろそろと肥育をやつてもよからうな、毎日阿麻仁を少しずつやつて置いて呉れないか。」教師は若い水色の、上着の助手に斯う云つた。豚はこれをすっかり聴いた。

そして又大へんいやになつた。楊子のときと同じだ。折角のその阿麻仁も、どうもうまく咽喉のどを通らなかつた。これらはみんな畜産の、その教師の語気について、豚が直覺したのである。(とにかくあいつら二人は、おれにたべものはよすが、時々まるで北極の、空のような眼をして、おれのからだをじつと見る、実に何ともたまらない、とりつきばもなようなきびしいところで、おれのことを考えている、そのことは恐い、ああ、恐い。) 豚は心に思いながら、もうたまらなくなり前の柵さくを、むちやくちやに鼻で突つ突いた。

ところが、丁度その豚の、殺される前の月になつて、一つの布告がその国の、王から発令されていた。

それは家畜撲殺同意調印法といい、誰たれでも、家畜を殺そうというものは、その家畜から死亡承諾書しょうだくしょを受け取ること、又その承諾証書には家畜の調印を要すると、こう云う布告だつたのだ。

さあそこでその頃は、牛でも馬でも、もうみんな、殺される前の日には、主人から無理に強いられて、証文にペタリと印を押したもんだ。ごくとしよりの馬などは、わざわざ蹄て

鉄いそをはずされて、ぼろぼろなみだをこぼしながら、その大きな判をぱたつと証書に押し込んだ。

フランドンのヨークシャイヤも又活版刷りに出来ているその死亡証書を見た。見たというのは、或る日のこと、フランドン農学校の校長が、大きな黄色の紙を持ち、豚のところにやって来た。豚は語学も余程進んでいたのだし、又實際豚の舌は柔らかで素質も充分あったのでごく流暢な人間語で、しずかに校長に挨拶した。

「校長さん、いいお天気でございます。」

校長はその黄色な証書をだまつて小わきにはさんだまま、ポケットに手を入れて、にがわらいして斯う云った。

「うんまあ、天気はいいね。」

豚は何だか、この語が、耳にはいつて、それから咽喉につかえたのだ。おまけに校長がじろじろと豚のからだを見ることは全くあの畜産の、教師とおんなじことなのだ。

豚はかなしく耳を伏せた。そしてこわごわ斯う云った。

「私はどうも、このごろは、気がふさいで仕方ありません。」

校長は又にがわらいを、しながら豚に斯う云った。

「ふん。気がふさぐ。そうかい。もう世の中がいやになったかい。そういうわけでもないのかい。」豚があんまり陰気いんきな顔をしたものだから校長は急いで取り消しました。

それから農学校長と、豚とはしばらくしいんとしてにらみ合ったまま立っていた。ただ一言も云わないでじいっと立って居おつたのだ。そのうちにととう校長は今日は証書はあきらめて、

「とにかくよくやすんでおいで。あんまり動きまわらんでね。」例の黄いろな大きな証書を小わきにかいこんだまま、向うの方へ行ってしまう。

豚はそのあとで、何べんも、校長の今の苦笑やいかにも底意のある語ことばを、繰くり返し繰り返して見て、身ぶるいしながらひとりごとした。

『とにかくよくやすんでおいで。あんまり動きまわらんでね。』一体これはどう云う事か。ああつらいつらい。豚は斯う考えて、まるであの梯ていけい形の、頭も割れるように思った。おまけにその晩は強いふぶきで、外では風がすさまじく、乾かわいたカサカサした雪のかけらが、小屋のすきまから吹きこんで豚のたべもの余りも、雪でまっ白になったのだ。

ところが次の日のこと、畜産学の教師が又やって来て例の、水色の上着を着た、顔の赤い助手といつものするどい眼付して、じつと豚の頭から、耳から背中から尻尾しっぽまで、まる

でまるで食い込むように眺めてから、尖った指を一本立てて、

「毎日阿麻仁をやつてあるかね。」

「やつてあります。」

「そうだろう。もう明日だつて明後日だつて、いいんだから。早く承諾書をとれあいんだ。どうしたんだらう、昨日校長は、たしかに証書をわきに挟んでこっちの方へ来たんだが。」

「はい、お入りのようでした。」

「それではもうできてるかしら。出来ればすぐよこす筈だがね。」

「はあ。」

「もう少し室をくらくして、置いたらどうだろうか。それからやる前日には、なんにも飼料をやらんでくれ。」

「はあ、きつとそう致します。」

畜産の教師は鋭い目で、もう一遍じいつと豚を見てから、それから室を出て行った。

そのあとの豚の煩悶さ、（承諾書というのは、何の承諾書だろう何を一体しろと云うのだ、やる前日には、なんにも飼料をやつちやいけない、やる前の日って何だろう。一

体何をされるんだろう。どこか遠くへ売られるのか。ああこれはつらい。つらい。豚の頭の割れそうな、ことはこの日も同じだ。その晩豚はあんまりに神経が興奮し過ぎてよく睡眠することができなかつた。ところが次の朝になって、やっと太陽が登った頃、寄宿舎の生徒が三人、げたげた笑つて小屋へ来た。そして一晩睡らないで、頭のしんしん痛む豚に、又もや厭いやな会話を聞かせたのだ。

「いつだろうなあ、早く見たいなあ。」

「僕ぼくは見たくないよ。」

「早いといいなあ、困こまつて置いた葱ねぎだつて、あんまり永いと凍こおつちまう。」

「馬鈴薯ばれいしょもしまつてあるだろう。」

「しまつてあるよ。三斗としまつてある。とても僕たちだけで食べられるもんか。」

「今朝はずいぶん冷たいねえ。」一人が白い息を手に吹きかけながら斯こう云いました。

「豚のやつは暖かそうだ。」一人が斯う答えたら三人共どつとふき出しました。

「豚のやつは脂肪でできた、厚さ一寸の外套がいとうを着てるんだもの、暖かいさ。」

「暖かそうだよ。どうだ。湯気さえほやほやと立たつているよ。」

豚はあんまり悲しくて、辛つらくてよろよろしてしまふ。

「早くやつちまえばいいな。」

三人はつぶやきながら小屋を出た。そのあとの豚の苦しき、（見たい、見たくない、早いといい、葱が凍る、馬鈴薯三斗、食いきれない。厚さ一寸の脂肪の外套、おお恐い、ひとのからだをまるで観透みとおしてるおお恐い。恐い。けれども一体おれと葱と、何の関係があるだろう。ああつらいなあ。）その煩悶の最中に校長が又やって来た。入口でばたばた雪を落して、それから例のあいまいな苦笑をしながら前に立つ。

「どうだい。今日は気分がいいかい。」

「はい、ありがとうございます。」

「いいのかい。大へん結構だ。たべ物は美味おいしいかい。」

「ありがとうございます。大へんに結構でございます。」

「そうかい。それはいいね、ところで実は今日はお前と、内内相談に来たのだがね、どうだ頭ははつきりかい。」

「はあ。」豚は声がかすれてしまう。

「実はね、この世界に生きてるものは、みんな死ななけあいかんだ。実際もうどんなもんでも死ぬんだよ。人間の中の貴族でも、金持でも、又私のような、中産階級でも、それ

からごくつまらない乞食こじきでもね。」

「はあ、」豚は声が咽喉につまって、はつきり返事ができなかつた。

「また人間でない動物でもね、たとえば馬でも、牛でも、鶏にわとりでも、なまずでも、バクテリアでも、みんな死ななけあいかんのだ。蜉蝣かげろうのごときはあしたに生れ、夕ゆうべに死する、ただ一日の命なのだ。みんな死ななけあならないのだ。だからお前も私もいつか、きつと死ぬのにきまつてる。」

「はあ。」豚は声がかすれて、返事もなにもできなかつた。

「そこで実は相談だがね、私たちの学校では、お前を今日まで養つて来た。大したこともなかつたが、学校としては出来るだけ、ずいぶん大事にしたはずだ。お前たちの仲間もあちこちに、ずいぶんあるし又私も、まあよく知っているのだが、でそう云つちや可笑おかしいが、まあ私の処ところぐらい、待遇たいぐうのよい処はない。」

「はあ。」豚は返事しようと思つたが、その前にたべたものが、みんな咽喉へつかえててどうしても声が出て来なかつた。

「でね、実は相談だがね、お前がもしも少しでも、そんなようなことが、ありがたいと云う気がしたら、ほんの小さなたのみだが承知をしては貰もらえまいか。」

「はあ。」豚は声がかすれて、返事がどうしてもできなかつた。

「それはほんの小さなことだ。ここに斯う云う紙がある、この紙に斯う書いてある。死亡承諾書、私儀永々御恩顧の次第に有之候儘、御都合により、何時にても死亡仕るべく候年月日フランドン畜舎内、ヨークシャイヤ、フランドン農学校長殿とこれだけのことだがね、」校長はもう云い出したので、一瀉千里にまくしかけた。

「つまりお前はどうせ死ななけあかないからその死ぬときはもう潔く、いつでも死にますと斯う云うことで、一向何でもないことさ。死ななくてもいいうちは、一向死ぬことも要らないよ。ここの処へただちよつとお前の前肢の爪印を、一つ押しておいて貰いたい。それだけのことだ。」

豚は眉を寄せて、つきつけられた証書を、じつとしばらく眺めていた。校長の云う通りなら、何でもないがづくづくと証書の文句を読んでも見ると、まったく大へんに恐かつた。とうとう豚はこらえかねてまるで泣声でこう云つた。

「何時にてもということは、今日でもということですか。」
校長はぎくつとしたが気をとりなおしてこう云つた。

「まあそうだ。けれども今日だなんて、そんなことは決してないよ。」

「でも明日でもというんでしよう。」

「さあ、明日なんていうよう、そんな急でもないだろう。いつでも、いつかというような、ごくあまいまいなことなんだ。」

「死亡をするということは私が一人で死ぬのですか。」豚は又また金切声で斯うきいた。

「うん、すっかりそうでもないな。」

「いやです、いやです、そんならいやです。どうしてもいやです。」豚は泣いて叫さけんだ。

「いやかい。それでは仕方ない。お前もあんまり恩知らずだ。犬猫ねこにさえ劣おとつたやつだ。」

校長はぶんぶん怒り、顔をまっ赤にしてしまい証書をポケットに手早くしまい、大股おおまたに小屋を出て行つた。

「どうせ犬猫なんかには、はじめから劣つていますよう。わあ」豚はあんまり口惜くやしさや、悲しさが一時にこみあげて、もうあらんかぎり泣きだした。けれども半日ほど泣いたら、二晩も眠ねむらなかつた疲れが、一ぺんにどつと出て来たのでつい泣きながら寝ね込んでしまう。その睡ねむりの中でも豚は、何べんも何べんもおびえ、手足をぶるつと動かした。

ところがその次の日のことだ。あの畜産の担任が、助手を連れて又やって来た。そして例のたまらない、目付きで豚をながめてから、大へん機嫌きげんの悪い顔で助手に向つてこう云

った。

「どうしたんだい。すてきに肉が落ちたじやないか。これじやまるきり話にならん。百ひやく姓しょうのうちで飼かつたつてこれ位にはできるんだ。一体どうしたてんだろう。心当りがつかないかい。頬ほお肉にくなんかあんまり減った。おまけにシヨウルダアだつて、こんなに薄うすくちやなつてない。品評会へも出せあしない。一体どうしたてんだろう。」

助手は唇くちびるへ指をあて、しばらくじつと考えて、それからぼんやり返事した。

「さあ、昨日の午後ごごに校長が、おいでになつただけでした。それだけだつたと思います。」
畜産の教師は飛び上る。

「校長？　そうかい。校長だ。きつと承諾書を取ろうとして、すてきなぶまをやつたんだ。おじけさせちやつたんだな。それでこいつはぐるぐるして昨夜一晚寝ないんだな。まずいことになつたなあ。おまけにきつと承諾書も、取り損そこねたにちがいない。まずいことになつたなあ。」

教師は実に口惜しそうに、しばらくキリキリ歯を鳴らし腕うでを組んでから又云つた。

「えい、仕方ない。窓をすつかり明けて呉くれ。それから外へ連れ出して、少し運動させるんだ。む茶くちやにたたいたり走らしたりしちやいけないぞ。日の照らない処を、きゆうし厩し

舎やの陰かげのあたりの、雪のない草はらを、そろそろ連れて歩いて呉れ。一回十五分位、それから飼料をやらないで少し腹を空すかせてやれ。すっかり気分が直つたらキャベジのいい処を少しやれ。それからだんだん直つたら今まで通りにすればいい。まるで一ヶ月の肥育を、一晩で台なしにしちまつた。いいかい。」

「承知いたしました。」

教師は教員室へ帰り豚はもうすっかり気落ちして、ぼんやりと向うの壁かべを見る、動きも叫びもしたくない。ところへ助手が細い鞭むちを持って笑つて入つて来た。助手は囲いの出口をあけごく町寧ていねいに云つたのだ。

「少しご散歩はいかがです。今日は大へんよく晴れて、風もしずかでございます。それではお供いたしましたよう、」ピシツと鞭がせなかに来る、全くこいつはたまらない、ヨークシャイヤは仕方なくのそのそ畜舎を出たけれど胸は悲しさでいっばいで、歩けば裂きけるようだった。助手はのんきにうしろから、チツペラリーの口笛くちふえを吹ふいてゆっくりやつて来る。鞭もぶらぶらふつている。

全何たひたひがチツペラリーだ。こんなわたしはかなしいのにと豚は度々たびたび口をまげる。時々

「ええもう少し左の方を、お歩きなさいましては、いかがでございますか。」なんて、口ばかりうまいことを云いながら、ピシツと鞭を呉れたのだ。（この世はほんとうにつらいつらい、本当に苦の世界なのだ。）こてつとぶたれて散歩しながら豚はつくづく考えた。

「さあいかがです、そろそろお休みなさいませ。」助手は又一つピシツとやる。ウルトラ大学生諸君、こんな散歩が何で面白おもしろいだろう。からだの為ためも何もあつたもんじやない。

豚は仕方なく又畜舎に戻もどりごろつと藁わらに横になる。キャベジの青い所を助手はわずか持つて来た。豚は喰たべたくなかつたが助手が向うに直立して何とも云えない恐い眼で上からじつと待つている、ほんとうにもう仕方なく、少しそれを噛かじるふりをしたら助手はやつと安心して一つ「ふん。」と笑つてからチツペラリーの口笛を又吹きながら出て行つた。いつか窓がすっかり明け放してあつたので豚は寒くて耐たまなかつた。

こんな工合ぐあいにヨークシャイヤは一日思いに沈しずみながら三日を夢ゆめのように送る。

四日目に又畜産の、教師が助手とやつて来た。ちらつと豚を一眼見て、手を振りながら助手に云う。

「いけないいけない。君はなぜ、僕の云つた通りしなかつた。」

「いいえ、窓もすっかり明けましたし、キャベジのいいのもやりました。運動も毎日丁寧

に、十五分ずつやらしています。」

「そうかね、そんなにまでもしてやって、やっぱりうまくいかないかね、じゃもうこいつは瘠やせる一方なんだ。神経性營養不良なんだ。わきからどうも出来やしない。あんまり骨と皮だけに、ならないうちにきめなくちや、どこまで行くかわからない。おい。窓をみなしめて呉れ。そして肥育器を使うとしよう、飼料をどしどし押し込んで呉れ。麦のふすまを二升とね、阿麻仁あまにを二合、それから玉蜀黍とうもろこしの粉を、五合を水でこねて、団子にこさえて一日に、二度か三度ぐらいに分けて、肥育器にかけて呉れ給えたま。肥育器はあつたろう。」

「はい、ございます。」

「こいつは縛しばつて置き給え。いや縛る前に早く承諾書をとらなくちや。校長もさっぱり拙ますいなあ。」

畜産の教師は大急ぎで、教舎の方へ走って行き、助手もあとから出て行った。

間もなく農学校長が、大へんあわててやって来た。豚は身体からだの置き場もなく鼻で敷藁を掘ほつたのだ。

「おおい、いよいよ急がなきゃならないよ。先せん頃ころの死亡承諾書ね、あいつへ今日はどうしても、爪判を押して貰いたい。別に大した事じゃない。押しして呉れ。」

「いやですいやです。」豚は泣く。

「厭いやだ？ おい。あんまり勝手を云うんじゃない、その身体からだは全体みんな、学校のお陰で出来たんだ。これからだつて毎日麦のふすま二升阿麻仁二合と玉蜀黍の、粉五合ずつやるんだぞ、さあいい加減に判をつけ、さあつかないか。」

なるほど斯こう怒おこり出して見ると、校長なんというものは、實際恐いものなんだ。豚はすっかりおびえて了しまい、

「つきます。つきます。」と、かすれた声で云つたのだ。

「よろしい、では。」と校長は、やつこのことに機嫌きげんを直し、手早くあの死亡承諾書の、黄いろな紙をとり出して、豚の眼の前にひろげたのだ。

「どこへつけばいいんですか。」豚は泣きながら尋たずねた。

「ここへ。おまえの名前の下へ。」校長はじつと眼鏡めがね越しに、豚の小さな眼を見て云つた。豚は口をびくびく横に曲げ、短い前みぎあしの右肢あしを、きくつと挙げてそれからピタリと印をおす。

「うはん。よろしい。これでいい。」校長は紙を引っぱって、よくその判を調べてから、機嫌を直してこう云つた。戸口で待つていたらしくあの意地わるい畜産の教師がいきなり

やって来た。

「いかがです。うまく行きましたか。」

「うん。まあできた。ではこれは、あなたにあげて置きますから。ええ、肥育は何日ぐら
いかね、」

「さあいずれ模様を見まして、鶏やあひるなどですと、きつと間違ひなく肥りますが、斯
う云う神経過敏な豚は、或は強制肥育では甘く行かないかも知れません。」

「そうか。なるほど。とにかくしつかりやり給え。」

そして校長は帰って行つた。今度は助手が変てこな、ねじのついたズツクの管と、何か
のバケツを持って来た。畜産の教師は云いながら、そのバケツの中のを、一寸つま
んで調べて見た。

「そいじや豚を縛つて呉れ。」助手はマニラロープを持って、囲いの中に飛び込んだ。豚
はばたばた暴れたがとうとう囲いの隅にある、二つの鉄の環に右側の、足を二本共縛られ
た。

「よろしい、それではこの端を、咽喉へ入れてやって呉れ。」畜産の教師は云いながら、
ズツクの管を助手に渡す。

「さあ口をお開きなさい。さあ口を。」助手はしずかに云ったのだが、豚は堅く^{かた}歯を食いしばり、どうしても口をあかなかつた。

「仕方ない。こいつを噛^かましてやって呉れ。」短い鋼^{はがね}の管を出す。

助手はぎしぎしその管を豚の歯の間にねじ込^こ込んだ。豚はもうあらんかぎり、怒鳴^{どな}つたり泣いたりしたが、とうとう管をはめられて、咽喉の底だけで泣いていた。助手はその鋼の管の間から、ズツクの管を豚の咽喉まで押し込んだ。

「それでよろしい。ではやろう。」教師はバケツの中のを、ズツク管の端の漏斗^{じょうご}に移して、それから変な螺旋^{らせん}を使い食物を豚の胃に送る。豚はいくら呑^のむまいとしても、どうしても咽喉で負けてしまい、その練つたものが胃の中に、入ってだんだん腹が重くなる。これが強制肥育だった。

豚の気持ちの悪いこと、まるで夢^{むちゆう}中で一日泣いた。

次の日教師が又来て見た。

「うまい、肥^{ふと}つた。効果がある。これから毎日小使と、二人で二度ずつやって呉れ。」

こんな工合でそれから七日というものは、豚はまるきり外で日が照っているやら、風が吹いてるやら見当もつかず、ただ胃が無暗^{むやみ}に重苦しくそれからいやに頬^{ほお}や肩^{かた}が、ふくらん

で来ておしまい息をするのもつらいくらい、生徒も代る代る来て、何かいろいろ云つていた。

あるときは生徒が十人ほどやつて来てがやがや斯う云つた。

「ずいぶん大きくなつたなあ、何貫ぐらいあるだろう。」

「さあ先生なら一目見て、何百目まで云うんだが、おれたちじゃちよつとわからない。」

「比重がわからないからなあ。」

「比重はわかるさ比重なら、大抵水と同じだろう。」

「どうしてそれがわかるんだい。」

「だって大抵そうだろう。もしもこいつを水に入れたら、きつと沈みも浮びもしない。」

「いいやたしかに沈まない、きつと浮ぶにきまつてる。」

「それは脂肪のためだろう、けれど豚にも骨はある。それから肉もあるんだから、たぶん比重は一ぐらいだ。」

「比重をそんなら一として、こいつは何斗あるだろう。」

「五斗五升はあるだろう。」

「いいや五斗五升などじゃない。少く見ても八斗ある。」

「八斗なんかじやきかないよ。たしかに九斗はあるだろう。」

「まあ、七斗としよう。七斗なら水一斗が五貫だから、こいつは丁度三十五貫。」

「三十五貫はあるな。」

こんなはなしを聞きながら、どんなに豚は泣いたろう。なんでもこれはあんまりひどい。ひとのからだをます枘ではかる。七斗だの八斗だのという。

そうして丁度七日目に又あの教師が助手と二人、なら並んで豚の前に立つ。

「もういいようだ。丁度いい。この位まで肥ったらまあ極度だろう。この辺だ。あんまり肥育をやり過ぎて、一度病気にかかってもまたあとまわりになるだけだ。丁度あしたがいいだろう。今日はもう飼えをやらんでくれ。それから小使と二人してからだをすっかり洗つて呉れ。敷しき藁わらも新らしくしてね。いいか。」

「承知いたしました。」

豚はこれらの問答を、もう全身の勢力で耳をすまして聴きいて居た。(いよいよ明日だ、それがあの、証書の死亡ということか。いよいよ明日だ、明日なんだ。一体どんな事だろう、つらいつらい。)あんまり豚はつらいので、頭をゴツゴツ板へぶつつけた。

そのひるすぎに又助手が、小使と二人やって来た。そしてあの二つの鉄環てつわから、豚の足

を解いて助手が云う。

「いかがです、今日は一つ、お風呂をお召しなさいませ。すっかりお仕度ができて居ます。」

豚がまだ承知とも、何とも云わないうちに、鞭がピシッとやって来た。豚は仕方なく歩き出したが、あんまり肥ってしまったので、もううごくことの大儀なこと、三足で息がはあはあした。

そこへ鞭がピシッと来た。豚はまるで潰れそうになり、それでもようよう畜舎の外まで出たら、そこに大きな木の鉢に入ったのが置いてあった。

「さあ、この中にお入りなさい。」助手が又一つパチツとやる。豚はもうやつとのこと、ころげ込むようにしてその高い縁を越えて、鉢の中へ入ったのだ。

小使が大きなブラッシをかけて、豚のからだをきれいに洗う。そのブラッシをチラツと見て、豚は馬鹿のように叫んだ。というわけはそのブラッシが、やっぱり豚の毛でできた豚がわめいているうちからだがすっかり白くなる。

「さあ参りましょう。」助手が又、一つピシツと豚をやる。

豚は仕方なく外に出る。寒さがぞくぞくからだに浸みる。豚はどうとうくしやみをする。

「風邪かぜを引きますすぜ、こいつは。」小使が眼を大きくして云った。

「いいだろうき。腐くさりがたくて。」助手が苦笑して云った。

豚が又畜舎へ入つたら、敷藁しきわらがきれいに代えてあつた。寒さはからだを刺すようだ。それに今朝からまだ何も食べないので、胃ももうからになつたらしく、あらしのようにゴウゴウ鳴つた。

豚はもう眼もあけず頭がしんしん鳴り出した。ヨークシャイヤの一生の間のいろいろな恐ろしい記憶おそが、まるきり廻まわり廻まわり燈籠とうろうのように、明るくなったり暗くなったり、頭の中を過ぎて行く。さまざまな恐ろしい物音を聞く。それは豚の外で鳴つてるのか、あるいは豚の中で鳴つてるのか、それさえわからなくなつた。そのうちもういつか朝になり教舎の方で鐘かねが鳴る。間もなくがやがや声がして、生徒たくさんが沢山たくさんやって来た。助手もやつぱりやつて来た。

「外でやろうか。外の方がやはりいいようだ。連れ出して呉れ。おい。連れ出してあんまりギーギー云わせないようにね。まずくなるから。」

畜産の教師がいつの間にか、ふだんとちがった茶いろなガウンのようなものを着て入口の戸に立っていた。

助手がまじめに入つて来る。

「いかがですか。天気も大変いいようです。今日少しご散歩なすつては。」又一つ鞭をピチツとあてた。豚は全く異議もなく、はあはあ頬ほおをふくらせて、ぐたぐたと歩き出す。前や横を生徒たちの、二本ずつの黒い足が夢ゆめのように動いていた。

俄にわかにカツと明るくなった。外では雪に日が照つて豚はまぶしさに眼を細くし、やつぱりぐたぐた歩いて行つた。

全体どこへ行くのやら、向うに一本の杉すぎがある、ちらつと頭をあげたとき、俄かに豚はピカツという、はげしい白光のようなものが花火のように眼の前でちらばるのを見た。そこから億百千の赤い火が水のように横に流れ出した。天上の方ではキーンという鋭すい音が鳴っている。横の方ではごうごう水が湧わいている。さあそれからあとのことならば、もう私は知らないのだ。とにかく豚のすぐよこにあの畜産の、教師が、大きな鉄てつ槌つを持ち、息をはあはあ吐はきながら、少し青ざめて立っている。又豚はその足もとで、たしかにクンクンと二つだけ、鼻を鳴らしてじつとうごかなくなっていた。

生徒らはもう大活動、豚の身体からだを洗つた桶おけに、も一度新らしく湯がくまれ、生徒らはみな上着そでの袖を、高くまくつて待つていた。

助手が大きな小刀で豚の咽喉のどをザクツと刺しました。

一体この物語は、あんまり哀れ過ぎるのだ。もうこのあとはやめにしよう。とにかく豚はすぐあとで、からだを八つに分解されて、厩舎きゅうしゃのうしろに積みあげられた。雪の中に一晩漬つけられた。

さて大学生諸君、その晩空はよく晴れて、金牛宮もきらめき出し、二十四日の銀の角、つめたく光る弦月げんげつが、青じろい水銀のひかりを、そこらの雲にそそぎかけ、そのつめたい白い雪の中、戦場の墓地のように積みあげられた雪の底に、豚はきれいに洗われて、八きれになって埋うづまった。月はだまって過ぎて行く。夜はいよいよ冴さえたのだ。

青空文庫情報

底本：「新編 風の又三郎」新潮文庫、新潮社

1989（平成元）年2月25日発行

2001（平成13）年4月25日14刷

底本の親本：「新修宮沢賢治全集」筑摩書房

入力：久保格

校正：林 幸雄

2003年8月8日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

フランドン農学校の豚

宮沢賢治

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>